

論壇

保守派

福島大学農学系教育研究組織設置準備室教授

生源寺眞一

どうやら私は保守派のようだ。こう感じるが多くなった。ただし、保守派のようだと言っても、保守か革新かといった政治的な立場の好き嫌いのことを考えているわけではない。

保守派だと感じるのは、典型的には、以前は使われていなかった言葉に接したときである。しっくりこない。他人が使うことにケチをつけるほどではないものの、一種の拒否反応の気分がある。流行語はどうということはない。定義のとおり、いずれは消えていくわけだから、ただ聞き流していればよい。もっとも、やたらとカタカナの妙な外国語が飛び交うのには、少々うんざりというのも正直なところだ。

以前に触れたことがなく、抵抗感のある言葉づかいとしては、例えば「将来的に」がある。「将来的な」という表現に出会うこともある。「的」が入ることで、もともとの「将来は」や「将来の」に、いくぶんの曖昧さが添えられているような気もする。いずれにせよ、私は使わない。けれども、読者諸賢もご承知のとおり、今では NHK のアナウンサーが使用しているし、書籍のタイトルの表現に用いられているケースもある。

農業や食品に関係する表現にも、気になると言うか、気に入らないものがある。いま頭に浮かんだのは「高品質な」。高品質は名詞であろう。それに「な」がついて、形容動詞風に使われているのだろうか。これも私は使わない。文脈の中でどうしても必要な場合には「高品質の」とする。あるいは、こちらは農業や食品の領域に限らないが、「真逆」という表現に遭遇することも多い。テレビ番組のやりとりでも使われている。私の個人的な体験だが、文章を読んでいて「真逆」の二文字に出会って困惑したことを覚えている。高校時代に「まさか」を漢字で「真逆」と書くことがあると教わっていたので、一瞬、「これは何だ」というわけである。

年齢の問題という面はある。我々にとっては、以前は使われていなかった言葉でも、これから育つ世代にしてみれば、日常的に接している言葉ということになるからである。ちなみに、ここで取り上げた三つの新語は、いずれもパソコンでひとつのフレーズとして変換された。すでに現代のボキャブラリーに組み込まれていると言ってよいのかもしれない。であればなおのこと、私は保守派だと思う。同世代であっても、新語を抵抗感なく使いこなしている人々も少なくない。彼ら彼女らは、保守派ではなくて改革派、いや、柔軟派ということになるだろうか。

かくして保守派を自認する私ではあるが、ものごとを変えることに常に抵抗するわけではない。とくに研究者としては、制度や仕組みの転換について、これを後押しする論説を書き連ねたこともある。例えば農村のインフォーマルな水利慣行について、現場の当事者の尽力で合理的な仕組みが形成された経緯を高く評価した経験がある。30 年以上前のことで、愛知県の農業用水の調査にもとづいて論文を書き上げた。たまたま水利組織のリーダーが克明な日誌を書き綴っていたことで、地域間の複雑な対立や粘り強い調整のプロセスのエビデンスが残されていた。

農村は決まりごとだらけで、社会の変化からも取り残されているという通念がある。そういった面のあることは否定しない。けれども、そんな中で利害の対立を克服し、残すべき要素は継承しつつ、新たな要素を思い切って導入する。さらに新たな要素が合理的に機能するか否かについて、試行錯誤の確認作業も行われていた。たしかに変化は生まれているのだが、その変化を支えていたのが村の人々に継承されてきた知恵であり、知恵の使い方の知恵であった。気分は保守派の私もここに引き付けられた。

後押しをする論説を書き連ねた制度や政策の転換には、農政の領域も含まれる。論説の寄稿どころか、改革のプロセスに実質的に関与したこともある。その最たるものは、2002年に1年近くをかけて検討された米の生産調整の制度改革であろう。農林水産省内に設けられた研究会の座長として、改革案のとりまとめにかなりのエネルギーを注いだ記憶がある。農協や地方自治体をはじめとして、経済界や消費者団体など、多くの利害関係者がメンバーとして参加し、長時間にわたって議論を交わした。あまり褒められたことではないが、会議が午後の2時から10時まで続いたこともある。

かなり大胆な改革ではあったが、新たな制度の仕組みを細部まで詰めたうえで、周知のための期間1年を準備し、なおかつ二段階のステップを踏んでいくことにしていた。すなわち、2004年度に第一段階、2007年度以降に第二段階という段取りであった。詳細は省くが、2007年度に第二ステップに移行したところで、参院選で民主党が圧勝したことで政治的な環境が大きく変わった。結果的に、生産調整改革は挫折した。そして、その後の10年間は生産調整問題に限らず、日本の農業政策は大きく揺れ続けてきた。

そんな状況について、国の農政が農業経営者や現場の行政にとって最大のリスク要因になったと申し上げてきた。もともと自然相手のリスクを避けられない農業だが、制度的な環境も予見不能な状態になったというわけである。ここで経済学者の端くれとして、リスクの概念についてひとこと付け加えておくと、リスクとは問題となる事象が生じる確率を把握できる場合を指す。これに対して、発生確率を知ることができない状況については、不確実性と呼んで区別している。

このような区別からすると、政治的な状況変化による政策の揺れは、不確実性の現象に起因しているとも考えることもできる。気象条件であれば、ある程度の発生確率を想定できるのに対して、一寸先は闇とは言わないまでも、政治の世界には予測不能な要素が多いからである。けれども、面倒な議論はこのあたりで切り上げて、リスクという言葉の安定性の欠如というほどの意味で使い続けることにしよう。

農政がリスク要因となったと述べてきたわけだが、農政そのものの立案者の側にあつては、農政の転換について、それによるプラスの効果やマイナスの影響を事前にかなり緻密に検討していたはずである。また、スムーズに移行できるような配慮も行われてきたと思う。これが農政の改革の場面、とくに生産調整のような大きな改革に立ち会ったひとりとしての見立てである。そうであるからこそ、保守派を自認しながらも、多くの農政改革には前向きな評価を表明してきたわけである。農政立案の現場にも過去から引き継がれてきた知恵が生きていた。

この点は、農業水利組織のような伝統的な枠組みの再編から強い印象を受けたときの気持ちと重なり合っている。水利施設のグレードアップや経済環境の変化によって、改革が不可避となった状況においても、残すべき要素は継承しつつ、合意を図るプロセスを経て新たな要素の導入に踏み切

っていた。とりわけ合意を形成する知恵の使い方に印象づけられたのである。しかるに、近年の日本の農政は、選挙の結果による政治的環境の変化や政権自体の交代によって大きく揺れ続けてきた。いわば外生的な要因によって、安定感を欠く結果となったわけである。

近年の日本の農政は、と述べた。ここは訂正が必要であろう。10年を一括りにはできない。第二次安倍政権に移行後は、それ以前とは異なる要素が働いているのではないだろうか。たしかに、政権交代という外生的な要因によって民主党政権下の既定路線が変更されている面はある。けれども、これに加えて、政策の決定プロセスそのものにも以前にはなかった要素が浮上しているように思う。すなわち、産業競争力会議や規制改革会議（現在は規制改革推進会議）などからの発信が引き金となって改革が進行している点に、現政権の農政のひとつの特徴がある。

農林水産省の外側からの問題提起を否定的に捉えているわけではない。農林水産省だけではないが、内輪の議論に傾きがちなのが農業界の悪弊だったと言ってよいであろう。論議の窓は広く開放されていてしかるべきなのである。しかしながら、最近の一連の政策転換の経緯を眺めると、転換に伴うリスクへの配慮に乏しいというのが率直な印象である。突如として浮上した「減反廃止」や廃止すべきとされた酪農の指定団体制度など、政策転換の効果と副作用に関する吟味が事前に十分行われたとは言い難いように思う。そもそも制度の転換がどんな状態への移行を目的として提案されたかについても、いまひとつ判然としない。

とにかく壊せば良くなる。そんな空気が漂っているのかもしれない。だとすれば、ここは保守派として違和感を覚えるところである。そう言えば、この国の政党のカテゴリー区分に従えば、自民党はむしろ保守政権である。安倍政権しかりである。けれども、安倍政権下の農政には、保守派を自認する小生にとっても違和感のあるものが含まれている。そのような農政メニューが政権の看板になっている面もある。保守派の自認が不適切なのか、保守政権という分類が不適切なのか。

どうやら冒頭のお断わりから脱線して、政治的な立場の領域に足を踏み入れそうになってきた。このあたりでパソコンのキー叩きを終えるほうが無難であろう。雑文にお付き合いいただいたことに、感謝申し上げます。